

書き言葉における「だろうか」 「のだろうか」の使い分け

三 枝 令 子

要旨

日本語教育の書き言葉の指導において、「だろうか」「のだろうか」の使い分けが問題になることがある。「のだろうか」は、形の上では「の」+「だろう」+「か」に分けられ、それぞれの構成要素の意味を併せ持つが、その使い方は一つの形式として個別に論じる必要がある。本稿では、「だろうか」に「現場性」、「のだろうか」に「客観性」という特徴があることを主張した。また、新聞のデータをもとに、使い分けの条件として、文章内での現れ方、疑問詞との共起の仕方、直前の述語の種類等を取りあげて論じた。

キーワード：だろうか、のだろうか、疑問、推量

0. はじめに

書き言葉で、文末に「か」を用いた疑問表現には、次の三種類の形式がある。

- ① か／のか
- ② ではないか／のではないか
- ③ だろうか／のだろうか

「べきか」、「わけにはいかないのか」等、モダリティを用いた形式があるが、これらはモダリティ表現の後ろで「か」の有無の対立があるので、①の「か／のか」に含めて考えることができる。本稿ではこの中の③「だろうか」「のだろうか」の使い分けにつ

いて考えたい。これらの語では「の」の有無が意味の違いをもたらしているが、後で見ると①②は、語の現れる環境や形式上の制約から使用条件が決まる部分が多い。しかし、「だろうか」「のだろうか」は意味が若干違うだけで、使用条件が規定しにくい。そうはいても、母語話者は、この二つがある部分では明確に使い分けている。

(1) <病院への見舞いに持っていく物を考えながら>

* 田中さんは、果物が好きなのだろうか。

田中さんは、果物が好きだらうか。

(2)* 田中さんがまだ来ないが、具合が悪いのだろうか。

田中さんがまだ来ないが、具合が悪いのだらうか。

上の(1)(2)に見る不自然さを生じさせないようにするための日本語教育での導入の仕方、説明のあり方を念頭に置きつつ、「だろう」「のだろう」の使い分けを考えてみたい。

1. 「か」と「のか」

先に、疑問を示す方法としてあげた三種類のそれぞれの表現は、「の」の有無が意味の違いをもたらしている。この「の」は、いわゆるモダリティ「のだ」の「の」である。「のだ」については数多くの先行研究がある。田野村(1990)は、「のダ」はあることがらの背後の事情を表す」と説明する。三上(1953)は、「スル」「シタ」と「スルノデアル」「シタノデアル」の違いを大きくはテンスとして扱い、前者を単純時、後者を反省時と呼んで区別している。そして、単純時の「シタ」と反省時の「シタノデアル」の違いとして次のような対立をあげている⁽¹⁾。

直接経験—報告—独立的一順

間接経験—解説—関係的一逆

「のか」については、古座(1987)が「か」と置き換えられない「のか」について、「たずねる文の中にさしだされている出来事が、話し手によって現実の出来事から推理された出来事(推論)であって、それと現実の出来事が照応しているか、どうかを相手にといかけて確かめようとしている文」と説明している。次の(3)は、単刀直入な疑問を表し、(4)は、「のか」文が表すことがらに対して、先立つ事情を考慮に入れた疑問になっている。

(3) 米国のイラン封じ込め政策は変化するか。(日経)

(4) しかし、岡山県がうたう「県民のための公共・文化性を備えた楽しい公園」というコンセプトの浸透は今一つ。住民の盛り上がりも熱気に欠ける。重い維持コストを抱えながら安定経営ができるのか。(日経)

(3)は、政策が変化するか否かを問うているだけだが、(4)は、先立つ事情と安定経営ができるか否かという「のか」の文の内容とが照応しているかを問うている。照応作業を行うという点で、「のか」文では、書き手が話題について前提知識を持っていることになる。次の(5)(6)は、疑問詞のある例である。

(5) <表についての問>

受験者数が最も少ないのはどのテストか。なぜそのように考えるか。(言語テスト)

(6) 鰯の資源量には一定の周期があるらしい。1965年は、極端に不漁で、漁獲高は1万トンだった。なぜ変動するのか。(日経)

(5)は、話し手があらかじめ答を知っている「クイズ質問」と呼ばれるものにあたる。ここでは、背景にある事情が考慮される余地はない。しかし、一般に疑問詞がある文には、前提となるものがあるはずである。これは日本語に限らずどの言語にも言えることだろう。Lyons (1977) は、英語の例で Who left the door open? には、Someone left the door open. が前提にあることをあげている⁽²⁾。こうした場合、日本語では(6)のように「のか」を用いる。

疑問を表す表現においては、話し言葉と書き言葉では形式、用法、意味にかなりの違いがある。これは、男性は使うが女性は使わないといった待遇表現上の制約（この点について三枝(2000)で論じた）、上昇か下降かというイントネーション等の影響による。しかし、書き言葉では、イントネーションが示されず、手紙を別にすれば、発話が特定の人に向けられることはない。

「か」「のか」の書き言葉での実際の使用例を見てみると、その用法は、大きく次の二つに分けられる。

- ① 疑問節・連体節内で不定を表す。
- ② 文末で不定を表す。

(7)(8)がそれぞれ疑問節、連体節内で、(9)(10)が文末で用いられている例である。

(7) 彼がどこに住んでいるか知らない。

- (8) しかし、審議会や諮問委員会による改革が、どのような総合的な社会像や国政の基本方針に基づくのかが、国民には明りょうでない。(日経)
- (9) HC 業界の競争が激化する中で、いかに低コスト化を進めるか。新社長の手腕が問われそうだ。
- (10) とくに信用秩序に影響する破綻処理では、行政の最高責任者である首相が一閣僚である蔵相に事前協議する異常ともいえる仕組みである。行政改革の姿はどうあれ、金融行政の最終権限は大蔵省が握ることを明示したものと見える。何事も大蔵官僚が取り仕切らなければ、気がすまないのか。これではまるで大蔵省天動説である。(日経)

疑問節・連体節内で用いられる「か」「のか」は、文のより内側に取り込まれるもので、話し手の主体的態度を表すモダリティ性は低い。一方、文末の「か」「のか」は、書き手が文の内容に確実な判断が下せないことを示している。そして、それにどう応じるかについては読み手側に任せている。しかし、先の(9)(10)を「か」「のか」のところまで文章を言い終わると唐突な感じがする。これは、文末の「か」「のか」に、情報が充足されることを求める問いかけ性が強いからだ。⑩では「何事も大蔵官僚が取り仕切らなければ、気がすまないのだろうか。」と、「だろう」が挿入されれば、ここで文を終わることが可能になる。すなわち、文末の「か」「のか」は、不定のモダリティを持つが、それ自体で文を言い切り、文章を言い終わる独立性には乏しいと考えられる。この例外は、「再度検討したらどうか。」の文に見るような「たらどうか」だが、これは「提案」を意味して、もはや疑問文とは言えない。そこで、書き手が、答えを求めず、言い切りの形で疑いのモダリティを表すためには、次に見る「だろうか」「ではないか」が用いられる。

2. 「ではないか」と「のではないか」

これは、どちらも言い切りの形で使われ、文章を言い終わることができる。「ではないか」は、「だ」の否定疑問、「のではないか」は「のだ」の否定疑問文である。否定疑問文は肯定の疑問文よりも意味が強調される。

- (11) 電子政府のかけ声、表現内容を当局が監視する青少年有害社会環境対策基本法案の準備……。問われているのは、「1984年」的な安全社会か、自由な市民社会かの選択ではないか。(朝日)

(12) それなりの手応えだったが、本音を言えば、トルコの人でさえラスタ-彩陶器の真の魅力はわからなかったのではないか。(日経)

(11)は、「選択だ」の否定疑問で、書き手は「問われているのは……の選択だ」と考えていることが明らかである。(12)の「わからなかったのではないか」は、「の」の挿入により、先立つ事情から「わからなかったと思われるがどうか」という疑問・意見の表明になる。つまり、「ではないか」「のではないか」は、前者が読み手への確認要求、後者が書き手の意見、疑問の呈示という働きを持ち、書き手の意図の違いがはっきりしている。

さらに、書き言葉の場合には、「のではないか」が、「の」の付加によって動詞・形容詞にも接続するのに対して、「だ」の否定形である「ではないか」は、名詞、な形容詞の語幹、疑問詞といった体言にしか接続しない。もちろん次の(13)のように、動詞に接続する場合もないわけではない。

(13) 洗い場で体を洗っていると、一人の若い女性が入ってきた。それもバスローブに身を包み、しゃなりしゃなりと浴槽までやってくるではないか。(日経)

(13)のように用言に「ではないか」が接続する場合には、もともとの否定疑問の意味がなくなる。「ではないか」で受ける内容は既定のことであり、話し手の非難、驚きの気持ちを表したり、気付かせの働きを持つ。

3. 「だろうか」と「のだろうか」

3.1 意味

「だろう」の意味については諸説あるが、ここでは奥田(1984)の次の定義を基本的な意味と考える。

述語に「だろう」をともなうおしはかりの文は、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をよりどころに、そこから想像あるいは思考によってあらたにひきだされる出来事をえがきだしている。

「だろうか」は、語構成の上からは、想像の中の出来事が不定の状態に置かれていることを表すと考えられる。本来想像は話し手の側で行われることで、聞き手への働きかけはない。先に古座の「のか」の解釈をあげたが、そこでは「……相手にといかけて

確かめようとしている文」であることが含まれていた。しかし、「だろうか」は、疑いが書き手の中にとどまっている。「だろうか」「のだろうか」が「か」「のか」と異なる点は、問いかけ性の有無と考えられるので、「だろうか」「のだろうか」の意味は次のように考えられる。

だろうか：文の内容の真偽を不確実なものとして示す。

のだろうか：文の内容と背景の事情とが照応しているか否かを一つの事案として客観的に示す。

(14) 甘やかしているだろうか。子供たちに3階の部屋を与えたりして。

(15) わが国の武力攻撃事態法案でいえば、たとえば「武力攻撃が予測されるに至った事態」を、だれがいかに判断するのか。最終判断はもちろん首相だろうが、そのとき、どんな材料をもとに判断するのか。情報を集めたり、あげたりするルートは大丈夫だろうか。(朝日)

(16) Eさんと初めてお会いしたのは、15年ほど前になるだろうか。(日経)

(17) あれは本当に湯けむりなのだろうか。(温泉)

(18) 見過ごせないのは、自民党の国防部会で「自衛官は暴走するくらいの方がいい」などと、リスト作成の擁護発言が続出したことだ。国防は国民との信頼関係あってこそ、という基本が分からないのだろうか。危険な傾向だといわざるをえない。(朝日)

(14)~(16)の「だろうか」の例では、書いている話の流れの中で浮かんだ疑いという「現場性」の意味合いが強い。それに対して、(17)(18)の「のだろうか」の例では、背景となる事情から推理されたできごとと、「のだろうか」の前の部分で述べるできごととの照応を行い、内容を確認して、立ち止まり振り返って抱いた疑いという「客観性」が感じられる。

「だろうか」が「現場性」の意味合いが強いことから、時の推移を追っていく(19)のような例では「だろうか」がふさわしい。

(19) この学校では、外国人児童の国の料理を給食に出している。学校中のみんなが食べておいしいと言えば、その生徒はどれほど元気づけられるだろうか。

これは、三上(1953)が単純時の特徴の一つとしてあげた、ことがらを「順」に述べ立てた例に当たると言える。

一方、「のだろうか」は背景となる事情との照合を行うことから、(20)(21)のように背後の事情や前の文の意味を説明し、その説明の妥当性を問う場合に用いられる。これは「だろうか」に置き換えにくい。

(20) 六年前に他界した父親の顔は相変わらずこわい。あれは本当に怒っていたのだろうか。(日経)

(21) 才知のほどは言うもおろか、しかも飄々たるところがXさんの持ち味である。目を東京に転じて、すぐにXさんの向こうを張れる人は見あたらない。やはり上方、浪花の文化が通人を産むのだろうか。

また、(22)のように、引用の「という」がある場合には、その前が概念化されるので「のだろうか」が用いられる。

(22) これだけ広い分野について、これだけ多くの研究成果を生んでいる国は、世界中に米国以外存在しない。これでも日本の技術力は駄目になったというのだろうか。(日経)

3.2 派生的意味

聞き手への働きかけがないということから、「だろう」には話し手、書き手の主張の強さをやわらげる用法がある。多くの場合「ではないか」「のではないか」には「だろう」が付加できる。これは、否定疑問の「ではないか」「のではないか」の主張の強さを「だろう」で弱めるためと考えられる。というのは、「だろう」が付加できないのは、次の例のように主張を弱める必要がない場合、もしくは、弱めない方がいい場合だからである。

(23) それを決めたのは担当者個人ではないか　　と、会社側は責任を認めようとしなかった。
*ではないだろうか

(24) 初版と大きく異なるのは、第6章のCAPMやAPTのパートで、数式を用いる説明の部分を付論へ回し、本文はなるべく言葉だけで説明するよう試みたことである。これによって、一層読みやすくなったのではないかと自負している。
?のではないだろうか

(入門市場)

また、話し言葉では、聞き手に依頼する場合、「だろうか」を用いて、主張の強さを和らげることがある。「だろう」が待遇表現の役割を担っているとも言える。たとえば、次のような例である。

(25) 「何とか引き受けてもらえないだろうか。」村長をはじめ村の人々が代わる代わる頼みに来た。だが、垣内さんは、拒み続けた。(日経)

(25)のような相手に直接問いかける文では、「だろうか」を「のだろうか」で言い換えることができない。ただし、こうした文は、書き言葉では引用文の中に現れ、地の文では使われない。しかし、書き言葉でも、読み手に直接問いかける次のような文があり、その場合は「だろうか」しか使えない。

(26) 読者は覚えているだろうか。この問題は前章でも論じた。

(27) ウォルター・ウェストンという人物をご存じだろうか。山登りの趣味のある人なら一度は耳にしたことがおありだろう。(日経)

以上、「だろうか」「のだろうか」の基本的な意味からその用法を見てみた。しかし、「現場性」が明らかな場合を除いて、「だろうか」「のだろうか」の違いは主観的なものが多く、言い換えが可能な場合も多い。そこで、使い分けの条件をできるだけ具体的にするために、次に、数量的な観察によって実際の使われ方をみることにする。

3.3 選択に関わる条件

一月分の新聞記事（日本経済新聞 1995年2月）を資料として、数量的分析を行った。以下の数字で、「だろう」形には、「であろう」、「ではないだろう」形には「ではなかろう」「ではないであろう」を含めた。「でしょうか」類は、待遇性があり話し言葉としての使用が明らかなのではずした。また、ここでの数は形態によっているので、引用文に現れるか否かなどの文内での位置は考慮していない。

ここでは次の三つを順に見てみたい。

- ① 段落のどの位置に現れるか。
- ② 疑問詞との共起の仕方。
- ③ 直前の述語の種類。

3.3.1 段落のどの位置に現れるか。

「だろうか」「のだろうか」が一つの記事（テキストと呼ぶ）のどこに現れるかを見

てみる。冒頭の文に用いられれば、それは問題提起の働きをすることになり、テキスト末で現れれば、問題提起と同時にまとめの働きを持つと言える。次の表で、「テキストはじめ」というのは、タイトル、リードを除く一文目に現れた場合、「テキスト末」というのは、記事の最後の一文に現れた場合である。

「ではないか」と「だろうか」の複合した「ではないだろうか」「のではないだろうか」は、それぞれ「ではない」の後ろで「の」の有無という対立を生じるので「だろうか」に含めた。(ただし、ここで扱ったデータには「(の) ではないのだろうか」という例はなかった。)

表1 「だろうか」の頻度

	テキストはじめ	テキスト中	テキスト末	計
疑問詞のある文	1	25	1	27
疑問詞のない文	3	51	5	59
ではないだろうか	0	4	10	14
のではないだろうか	1	15	3	19
合計	5	95	19	119

表2 「のだろうか」の頻度

	テキストはじめ	テキスト中	テキスト末	計
疑問詞のある文	3	39	5	47
疑問詞のない文	3	39	18	60
合計	6	78	23	107

上の表1, 2から、「だろうか」「のだろうか」は、テキストのどこにも現れることがわかる。「テキスト末」に使われるということは、これで言い終わる文があるということで、モダリティとしての独立性が強いことがわかる。特に「のだろうか」は、「だろうか」よりテキスト末に用いられることが多い。また、「だろうか」「のだろうか」自体の使用頻度には大きな違いはない。疑問詞のあるなしについては、「のだろうか」の方が疑問詞のある文で使われることが多いと言える。表1の「(の) ではないだろうか」の文には、疑問詞の入った例はなかった。

3.3.2 疑問詞との共起の仕方

「だろうか」「のだろうか」は、疑問形式だから、当然疑問詞と共起することが多い。

これは、「だろう」の有無にかかわらず「か」「のか」の対立でも問題になることである。たとえば、話し言葉の次のような例を考えてみよう。

(28) もう昼ご飯食べた？

—うん。

どこで食べたの？

—生協。

昼ご飯を食べたか否かをたずねる場合には「のか」は必要ない。上の例文では男女両用の文として「か」のない例を挙げたが、丁寧体では「もう昼ご飯を食べましたか」と「か」を用いる。しかし、どこで食べたかを問題にするときには、あるいは、誰と食べたかを問題にするときには、「どこで食べたんですか」「誰と食べたんですか」と、「のか」を使うのが自然で、「どこで食べましたか」「誰と食べましたか」は不自然である。すなわち、「の」によって名詞化し「の」の前の部分全体をくくらないと、「か」の持つモダリティが文全体には及ばない。野田(1997)は、「のだ」を「スコープの「のだ」「ムードの「のだ」」に分け、前者は構文的に必要とされるとしているが、疑問詞と共起する「のだろうか」は、この「スコープの「のだ」」に当たる。

「だろうか」「のだろうか」が疑問詞とともに使われる場合、どのような疑問詞が、どのように使われているかをみる。

表3 「疑問詞+だろうか」の内訳

疑問詞の種類	
どうだろうか。(内「いかが」1)	12
何だろうか。	3
なぜだろうか。	1
何年前だっただろうか。	1
どう、誰が、どちらが~だろうか。	各2
どんな、どうして、どれほど、どれくらい~だろうか。	各1
合計	27

表4 「疑問詞+のだろうか」の内訳

疑問詞の種類	
どう~のだろうか。	11
どのような~のだろうか。	9
どのように~のだろうか。	6

何を～のだろうか。	3
どこへ、どこに、どこまで、どんな、いつ、何が、誰に～のだろうか。	各2
いつまで、どの程度、なぜ、だれが～のだろうか。	各1
何なのだろうか。	1
合計	47

表3, 4からわかるように、疑問詞との共起の仕方には「だろうか」「のだろうか」両者の違いがはっきり表れている。まず第一に「だろうか」と共起する疑問詞は述部に現れ、「のだろうか」の場合は文の述部以外に現れる。次の(29)(30)がその例である。

- (29) 選手という存在にとって一番大切なことは何だろうか。
 (30) では、機関投資家は企業アナリストのどのような情報を重要視するのだろうか。

これは、述部に疑問詞がある場合は、文の焦点（一番問いたいところ）が明らかなのに対して、述部以外に疑問詞があるときには文全体を「の」でくくらないと「か」の持つモダリティが文全体に及ばないためである。「生協で昼ご飯を食べましたか」は不自然で、「生協で昼ご飯を食べたんですか」としなければならないのと同じ理由である。

次に疑問詞の種類だが、「のだろうか」と共起する疑問詞は、「どう」「どのような／に」が大半を占める。「のだろうか」と共起する「どう」は、次の例のように「どのよう／に」と言い換えられる。

- (31) 一方、地元の日本人はこのクラブをどう見ていたのだろうか。
 (32) 円安悲観論者はこの事実を、自らの悲観論とどう整合的に説明するのだろうか。

「のだろうか」は前提があつての問いかけで、初出の問いかけではない。ものごとの存在を認めて、次に出される問は、「どのよう（に）」というその存在のあり方であるのが普通だろう。「だろうか」の場合の疑問詞も数の上では「どう」が多い。しかし、この「どう」には、次の(33)のように「どのよう」と言い換えられるものと、(34)のように言い換えられないものがある。

- (33) ところでこの県の観光への対応はどうだろうか。
 (34) たまには広大な星空を眺め「恐竜はなぜ死んだか」などに思いを巡らせ、悠久の気を養ってみてはどうだろうか。

「だろうか」と共起する「どう」のうち、それが提案を示す場合と、「どのよう」に言

い換えられる場合とは、資料の中では半々だった。ここにも「だろうか」の「現場性」がみてとれる。

先に述べたように、述語に疑問詞がある場合には、「の」は必要ない。質問の焦点は、もともと述部にあるからだが、そこにあえて「の」を挿入すると、ムード性が強まる。

(35) 今の子供にとって正月の思い出は何なのだろうか。ファミコンゲームか、ホテルのイベントか。地球温暖化で寒い冬はなくなり、自然も少なくなった。

「なんだろうか」とすれば、単純な疑問だが、上の例では、書き手がこの文の表す内容にある思いこみを持っていることが伺われる。

3.3.3 「だろうか」「のだろうか」の直前の述語

「ではないか」という「だ」の否定疑問文では、不定を表す用法で「だ」の前に来ることができるのは名詞だけだった。「だろう」の「だ」は、「だ」の活用形と考えられるから、本来は「だろう」は体言にのみ接続し、用言には「う・ろう」という推量の形を用いた。今日では「だろう」が独立して用言にも接続するようになったが、「あろう」「なかろう」という形もまだ多少残ってはいる。ただ次の表5を見ると、「だろうか」は、やはり名詞、疑問詞の体言と結びつくことが多く、「のだろうか」が用言と結びつくことが多いことがわかる。

表5 「だろうか」「のだろうか」の前の述語

	だろうか	のだろうか
動詞		
ル形	15	60
タ形	0	12
可能形	13	9
否定形	8	6
ではない	14	0
のではない	19	0
ご存じ	3	0
名詞	25	7(名詞+な)
な形容詞	2	3
形容詞	3	9
疑問詞	17	1(名詞+な)
合計	119	107

もう少し詳しく見てみると、「のだろうか」の前が動詞のル形の場合は表に見るように60例だが、このうち38例は、文中に疑問詞がある場合で、この場合は、構文的に「のだろうか」が必要とされる。疑問詞がない文で動詞のル形が「のだろうか」と共起するのは、22例ということになり、「だろうか」と数の上では大きな違いはない。しかし、同じル形であっても、「だろうか」「のだろうか」の場合では、述語の意味合いが異なるようだ。

- (36) もし週30時間制にしたら人材が殺到するだろうか。
 (37) 共通の財政政策なしで通貨統合が成功するだろうか」と疑問を投げかけた。
 (38) だが、少子・高齢化はそれほど過酷でつらい社会を生むのだろうか。
 (39) 既存の政治や経済の枠組みが崩れる一方で、新たな枠組みも見えてこない時期には、この手の事件が世界のあちこちで起きるのだろうか。

一見どの例でも「だろうか」「のだろうか」の言い換えが可能なように見える。しかし、「だろうか」の場合には、動作動詞の現在形は書いている時点を起点に未来のことを表すが、「のだろうか」の場合、「の」によって叙述が概念化、情報化され、その概念化、情報化されたことがらについて論じているように思われる。そのため、テンスが書き手の今いる時点と切り離され、動詞の現在形が単純に未来を表しているとは言えないようだ。それに対して、概念化のない「だろうか」では、書き手は、書いている時点に立っているのも、想像することがらの世界と時間軸上の未来とが重なることになる。なお、先に引用の「という」は、その性質から「のだろうか」の前に現れると述べたが、このデータには「というのだろうか」が2例あった。

次に、動詞のタ形は表5の新聞のデータでは「のだろうか」としか共起していない。

- (40) 銀行が個性的な人材を求めているという。銀行の体質が変わってきたの
か。
 (41) 日本とアジアの他の国々との差は小さい。日本の技術力は低下してしまったの
だろうか。

過去の事態は、振り返らなければならないことがらだから、「の」が用いられるのが自然である。その意味で過去形と共起するのは「のだろうか」だけという条件を設定することができそうだ。しかし、実際には、次のように「ただろうか」という形式が存在しないわけではない。

(42) 彼は、もう空港に着いただらうか。

(43) 日本人にとって温泉とは心の湯あみの湯であった。そんな温泉のことをわれわれはわすれていなかつたらうか。(温泉)

これも、書き手は、書いている時点でどういうことが起こったか、あったかを想像し、その真偽を問題にしている。先立つ事情との照合をしないという点で「現場性」が強い。話し言葉のひとりごとで使われることが多く、客観性の高い叙述には現れにくいと言える。

3.3.4 その他の構文的条件

以上、三つの選択条件を数量的なデータをもとに見た。こうした数量的な分析では現れないが、選択の条件として、さらに次のようなことがあげられる。二点あげる。一つは、複文内の結びつきの強さ、もう一つは「のだらうか」文の持つ反語性である。

3.3.4.1 複文内の結びつきの強さ

(44) a: 法学部長がそんなことを言って、恥ずかしくないだらうか。

b: 法学部長がそんなことを言って、恥ずかしくないのだらうか。

(45) a: ? 天気が悪いと、遠足は中止されるだらうか。

b: 天気が悪いと、遠足は中止されるのだらうか。

(46) a: *彼はお母さんの料理がおいしいから、たくさん食べるだらうか。

b: 彼はお母さんの料理がおいしいから、たくさん食べるのだらうか。

(44)のab文は、意味が微妙に異なる。a文は、恥ずかしくないか否かを問題にし、b文は恥ずかしい原因が発言にあることまで含めて問題にしている。て形による結びつきはゆるやかなため、それが「の」に含まれる解釈、含まれない解釈どちらも可能にする。しかし、恒常的な条件を表す「と」による接続では、「の」でくられる範囲に複文全体が入りやすく、(45)のa文は少し落ち着きが悪い。さらに、理由の「から」による複文では、「から」の接続の強さから、構文的に「の」で体言化しないと、すなわち「のだらうか」を用いないと非文になる。(46)のa文の構造は、「(おいしいから)(たくさん食べるのだらうか)」ではなく、「(おいしいからたくさん食べる)のだらうか」と分析できる⁽³⁾。

3.3.4.2 「のだらうか」の反語性

もう一つの条件は、「のだろうか」文の持つ反語性である。

(47) 中国の光ファイバー通信網のような高度なインフラに援助が必要だろうか。

なのだろうか。

(48) 帝国ホテル大阪の隣に来年二月完成する「OAP (大阪アメニティパーク) レジデンスタワー東館」は立地の良さが売り物。ともにバブル崩壊を乗り越えて販売にこぎ着けたが、今の時勢に受け入れられるだろうか。

のだろうか。

(49) アセスメントを通じ発電所建設に地域住民の理解を得るには内容の公正さだけでなく、外形の公正さも必要だ。発電所だけ別枠の制度で住民の信頼が得られるだろうか。むしろ統一的な制度に積極的に参加し、環境保全を重視する姿勢を明のだろうか。

にして国民の理解を求めるべきだろう。

(47)~(49)の原文の「だろうか」を「のだろうか」に替えると、書き手が文の内容に否定的な意見を持っている印象を受ける。「のだろうか」は、先立つ事情を考慮に入れながらその文の内容が不確実という判断を示しているのだから、書き手は文の内容にもともと批判的、否定的な意見を持っていると読みとれることが多い。疑問詞のない文は、ほとんどがそう読みとれると言ってもいい。しかし、これは一般的な知識と関わる文脈の働きが大きいと考えられ、文脈のあり方は多様なため、これを統語的に条件付けるのはむずかしい。ただ、「いったい、本当(に)、果たして」などの副詞が使われる次のような場合には、話題のことがらについて書き手が否定的な考えを持っていることが明らかである。

(50) いったい日本にオーケストラがいくつあると考えているのだろうか。(文藝春秋)

(51) 幼稚園の弁当なども同じ。いろいろなおかずを詰め込んだ「テーマパーク」「動物園」のような弁当ばかりだ。偏食をさせないために手を替え品を替えお母さんたちが頑張っていることはわかる。だが本当に子どもは偏食なのだろうか。(朝日)

もともと前提知識があることについて「本当に」とわざわざたずねるのは、その内容に対して疑いを持っているからだと考えられる。

4. まとめと日本語教育への応用

以上、「だろうか」と「のだろうか」の違いを見てきた。使い分けのルールとしてわかりやすいのは、疑問詞と共起する場合である。疑問詞が述部にあるときは「だろうか」、述部以外にあるときは「のだろうか」が用いられる。「だろうか」は、基本的には書いている時点に立っての想像で、「現場性」が強い。一方、「のだろうか」は、周囲の事情との突き合わせ作業をするという思考プロセスがあるために、概念化されたことがらを扱う。そのため、「だろうか」と異なり、書いているときの流れとは切り離され、「客観性」がある。また、取り上げることがらについて、否定的、疑いを持っていることを表すことが多い。しかし、これは書き手がことがらをどう切り取るかという問題なので、選択の自由度が高い。冒頭にあげた「田中さんは、果物が好きだろうか。」「田中さんは、果物が好きなのだろうか。」は、文脈がなければ、どちらも可能な表現としか言えない。日本語教育上は、〈病院への見舞いに持っていく物を考えながら〉〈たくさん果物を食べているのを見て〉等と条件を付けることによって使い方を明確にする必要がある。また、「のだろうか」には書き手の疑いが込められていることが多いが、これもそう読みとれる場合があると言うより、疑いを込めたいときには「のだろうか」を使うと言い切った方がよいように思われる。

注

1. 三上章 (1953) 241 頁。
2. John Lyons (1977) *Semantics 2*, Cambridge University Press, p. 758.
3. ただし、田窪 (1987「統語構造と文脈情報」『日本語学』5月) が指摘しているように、「から」が理由ではなく、判断の根拠を表す場合には、「から」が「の」のスコープに入らず、「のだろうか」が使えない。

例 彼は好き嫌いが激しいからたくさん食べるだろうか。

この構造は「彼は(好き嫌いが激しいからたくさん食べる)だろうか」ではなく、「彼は好き嫌いが激しいから(たくさん食べる)だろうか」と考えられる。

例文出典

日経：日本経済新聞 (3.3.1~3.3.3の例文は(28)(42)(43)を除き、日本経済新聞1995年2月のもの。)

朝日：朝日新聞

文藝春秋：文藝春秋

言語テスト：『言語テストの基礎知識』J.D. ブラウン著 和田稔訳 大修館書店

入門市場：『入門証券市場論』釜江廣志 有斐閣

温泉：『温泉教授の温泉ゼミナール』松田忠徳 平凡社

(出典の記述のないものは作例)

参考文献

安達太郎 1999 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

奥田靖雄 1984 「おしはかり (一)」『日本語学』2月

古座暁子 1989 「～か，～のか 一会話文における場合一」『教育国語』97

三枝令子 2000 「助動詞「だ」と助詞「か」の結びつきをめぐって」『一橋大学留学生センター紀要3』

白川博之監修・庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 2001 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

田野村忠温 1990 『現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』和泉書院

寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味2』くろしお出版

野田春美 1995 「～ノカ？，～ノ？，～カ？，～0？一疑問文の文末の形一」『日本語類義表現の文法・上』くろしお出版

野田春美 1997 『「の (だ)」の機能』くろしお出版

三上章 1953 『現代語法序説』くろしお出版 (1987年復刊第6刷)